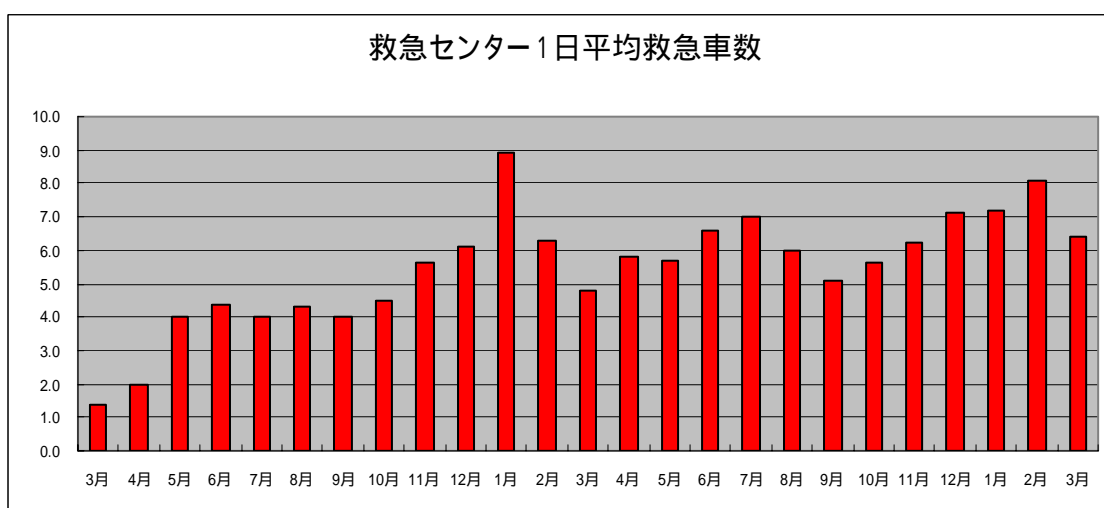
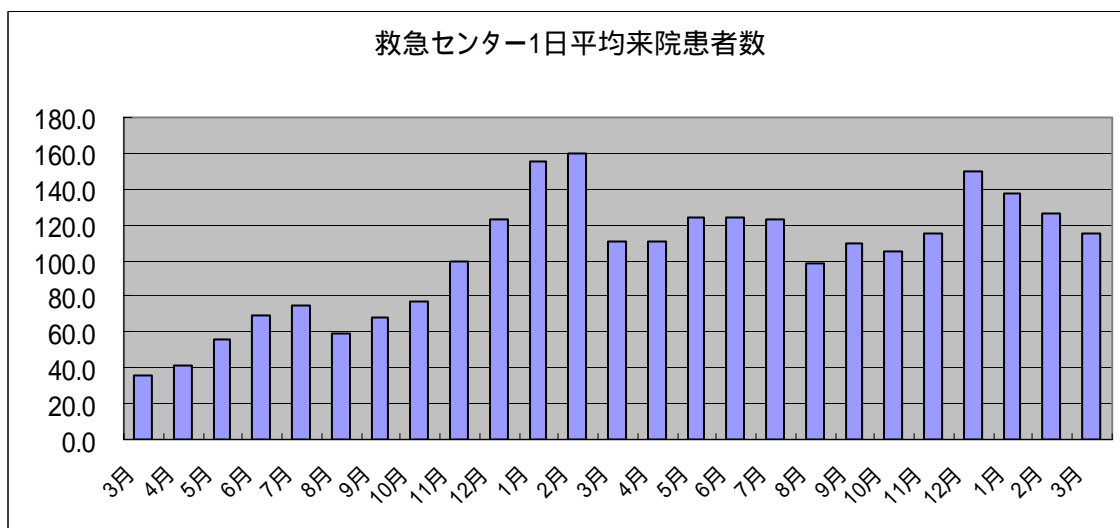


## 4-1-2 救急センター（救急診療科）

### 1. 診療

救急センターは、国立成育医療センターの基本理念である 1) 最適な医療を提供するためチーム医療を行う、2) いつでも誰にでも開かれている、3) 成育医療に関する救急医療を行う、に沿い、「いつでも誰でも、結果的に重症であるか軽症であるかを問わず」全患者を受け入れている。そして、院内でトリアージを行い、基準に従って蘇生、緊急、準緊急、非緊急に分け、緊急度に応じて診療している。いわゆる三次救急患者のみ受ける、という日本の救命救急センターの院外トリアージの考え方は全く異なったアプローチである。自ら訴えることができず、かつ予備力が小さく変化の速度が大きい小児患者に対しては、まず全ての患者を受け入れ、その後に院内でトリアージをして緊急度に応じて診療する、という体制が適していることは、欧米、オセアニアの小児医療の経験で明らかである。我が国の小児医療体制、特に各地の小児病院のあり方が見直されつつある時期にあたり、ナショナルセンターが率先してこのような体制をとっている意義は大きいと思われる。



開院以来、救急センターに来院した1日（24時間）の平均患者数と救急車の台数を月ごとに図に示す。開院後最初の1年間の総来院患者数は30,936名であったが、2年目は43,792名と42%の増加であった。トリアージ分類別に見ると、「蘇生」患者が年間43名から72名へ増加したのが目

立ち、救急車による搬入患者数も一日平均 4.6 人から 6.3 人に増加した。より重篤な患者の来院が増えていることを示していると考えられる。このような患者増に対しては、今年度から救急診療科医師を 1 名増員し、また看護単位を 1 年目のように外来との併任ではなく救急センター専任として対応している。小児救急医療の危機が叫ばれている今日、ナショナルセンターとして救急診療・看護の専門家を育成する体制が整ってきたと言える。

2003 年度に新たに開始した診療として、他院からの重症患者の搬送があげられる。これは、24 時間体制で他院からの依頼を受けて当院から医師、看護師を派遣し、心肺蘇生などの治療に参加し、容態を安定させた後に当院ICUまで搬送する、という診療である。新生児医療においては 1980 年代よりすでに行われ、新生児死亡の低下に大いに貢献してきたが、新生児期以降の小児患者においては全国で初めての試みである。2003 年 6 月より開始し、28 名の呼吸または循環不全の患者を当院ICUに入院させた。依頼元は一般病院が半数で、他は大学病院(10 件)、救急救命センター(4 件)であった。年齢は 5 歳以下が 80%を占め、特に 1 歳未満の乳児例が目立った。基礎疾患としては、痙攣重積症や意識障害を呈する中枢神経系の病態が 50%を占め、次いで上気道閉塞やARDSといった呼吸器系の疾患が 32%であった。少数ではあったが循環器系疾患の 4 例は心筋炎、心筋症や発作性頻拍症で重篤なケースが多く、またその他に分類した 1 例は、白血球数が 80 万/mm<sup>3</sup>を超えた急性リンパ性白血病の症例で、呼吸不全を来していた。

小児の重症例への対応には、このように当院から専門家を派遣して他院のスタッフと共同で初期治療を行い、その後当院のICUまで救急診療科の管理下で搬送する、というのが、救命率を改善するために有効な方法だと考えられる。このような試みを通して新しい小児救急医療体制を作っていくことが、ナショナルセンターとして当院の果たすべき役割であろう。

## 2. 研修

主に小児の救急患者を扱っている施設で救急患者数が年間 4 万人を超える施設はわが国ではほとんど無いといってよい。しかしながら、海外では米国のボストン、フィラデルフィア、カナダのトロントの小児病院をはじめ年間 5 - 6 万人の救急患者を取り扱っている小児病院は多い。医師や co-medical staff の研修の質を担保するという観点からは、ある程度以上の患者数が必要である。その点では一応の目的を達成したと考えている。2003 年度は、救急診療科では手術集中治療部のレジデント 18 名、総合診療部レジデント 6 名、国立東京医療センター成育コースの研修医 4 名、同内科コースの研修医 4 名、成田日赤病院から 2 名、湘南鎌倉病院、兵庫県立こども病院、神戸市立中央市民病院、大阪医科大学から各 1 名が研修を受けた。豊富な症例数のもとで、有意義な研修ができたものと考えている。

わが国の卒後教育のなかで、系統だった心肺蘇生の研修が欠如していることは大きな問題である。この点を解決するために、救急診療科は手術集中治療部とともに、国際的に標準化された小児心肺蘇生のガイドラインである Pediatric Advanced Life Support( PALS )を導入した。American Heart Association の指導のもとにインストラクターの資格を得た救急診療科のスタッフが、手術集中治療部のスタッフとともにまず院内のレジデント、次いで院外からの希望者に PALS を教えている。開院直後の 2002 年 4 月に American Heart Association より医師を招聘して第一回目を開催して以来、2004 年 3 月末までに合計 25 回のコースを開き、インストラクター 35 名、プロバイダー 500 名余りを養成した。わが国全体の小児医療の卒後教育にも貢献できていると自負している。当院は、American Heart Association が認定したわが国の International Training Center となっており、わが国の小児医療の卒後教育の改革が当院から始まっている、といえよう。PALS の普及はナショナルセンターとしての当院の大きな役割の一つである。